

中世小説『夢物語』の翻刻及び鑑賞本文

本論は、未発表の物語『夢物語』（個人蔵）の解題及び翻刻と鑑賞本文を掲載する。題簽や収められている桐箱に『夢物語』と記されているが、内容は天稚御子に関するもので、御伽草子の『あめわかみこ』と同様の構想を持っている。特に『風葉和歌集』の中の散逸物語『夢ゆゑ物思ふ』三首と類似した和歌二首が存し、これを翻案とする作品群に属するものであると言える。ただ、詳細に読み解くと、これまでに紹介されている慶応義塾図書館蔵『雨わかみこ』や東北大学付属図書館蔵『あめわかみこ』と相異なる箇所も多々見られる。これらの二本（以下、「他本」と記す）との比較考察等には、紙面の都合上『甲南国文』64号に譲りたい。

一、書誌

本書は、縦二四・七糎、横一七・四糎の四ツ半本一冊。列帖装。表紙は、紺地金泥表紙で、金銀砂子が密に散らしてある。表紙の中央には『夢物語』と墨書きされた型押し模様のある題簽（縦一五・五糎、横三・三糎）があり、その右には、極札一葉が貼りつけてある（写真A参照）。

(1) 見返しは、総金箔である。本書は三折からなっており、一折目が八枚・一六丁、二折目が六枚・一二丁、三折目が三枚・六丁の全三四丁。墨付は二九丁で、巻頭に二丁、巻末に三丁の遊紙があり、一面九行書きである（写真B参照）。ただし、二六丁裏については、八行目までしか書かれていない（写真C参照）。

野見山 亜沙美
竹内 彩
北村 麻里



写真A 表紙・極札

しかし、二七丁表から二九丁裏までは、九行目まで書かれている。二七丁表からの内容を見てみると、二七丁表以降には、一折目最後の二四丁裏から続く内容が書かれている。また、二折目の一五丁表以降には、三折目の二九丁裏から後の内容が書かれていることがわかった。書写された際には、一折目八枚（二六丁）、二折目九枚（二八丁）の二折からなっていたものが、修復の際に綴じ誤ったのだろうか。現在では、一折目八枚（二六丁）、二折目六枚（二二丁）、三折目三枚（六丁）の三折となっており、錯簡があると言える。

また、本書には、二葉の極札がついている。一つは先述した通り、表紙にある題簽の右側に貼り付けられている(写真 B 参照)。「細川殿三斎夢物語」との墨書きがあり、その下に極印が押し印してある。この極印は、『和漢書画古筆鑑定家印譜』によると、古筆家分家の古筆勘兵衛、了仲、了観あたりのものようである。しかし、この極札は表紙に糊付けされているため、裏面が確認できず鑑定者は特定でき

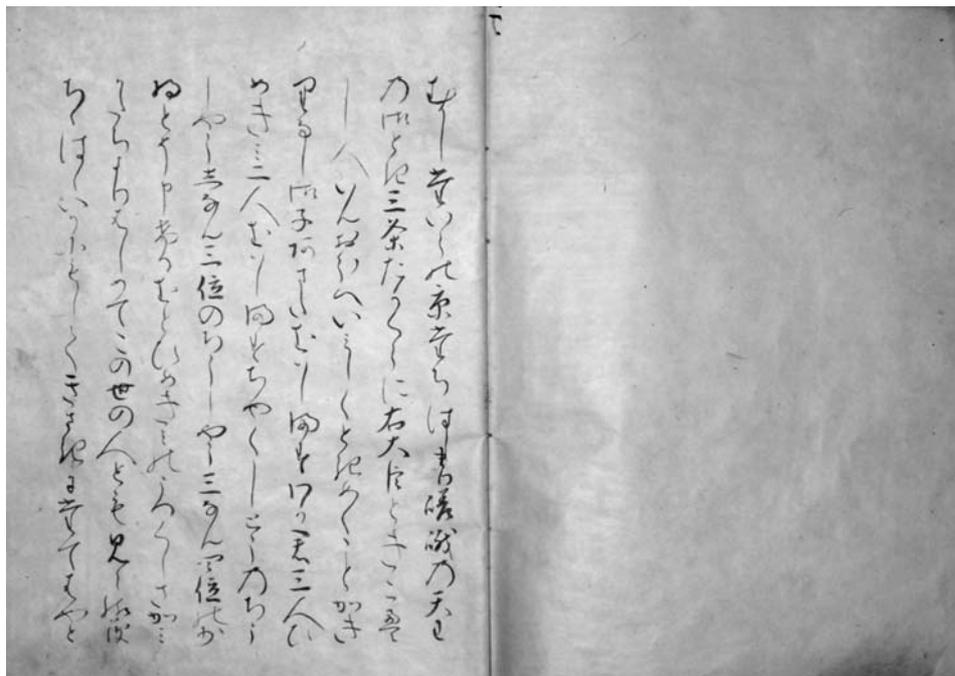


写真 B 墨付一丁表

ない。もう一つは、本書とともに桐箱に収められており、表面に「細川参議忠興卿むかしたいらの」、裏面に「四半本一冊墨付二十九枚癸丑冬」と墨書きされており、それぞれその下に極印が押されている(写真 D・E 参照)。表裏の極印から判断すると、これは大倉好齋が鑑定したようである。

この『夢物語』に付されている極札二葉は、いずれも細川忠興(三斎)筆との鑑

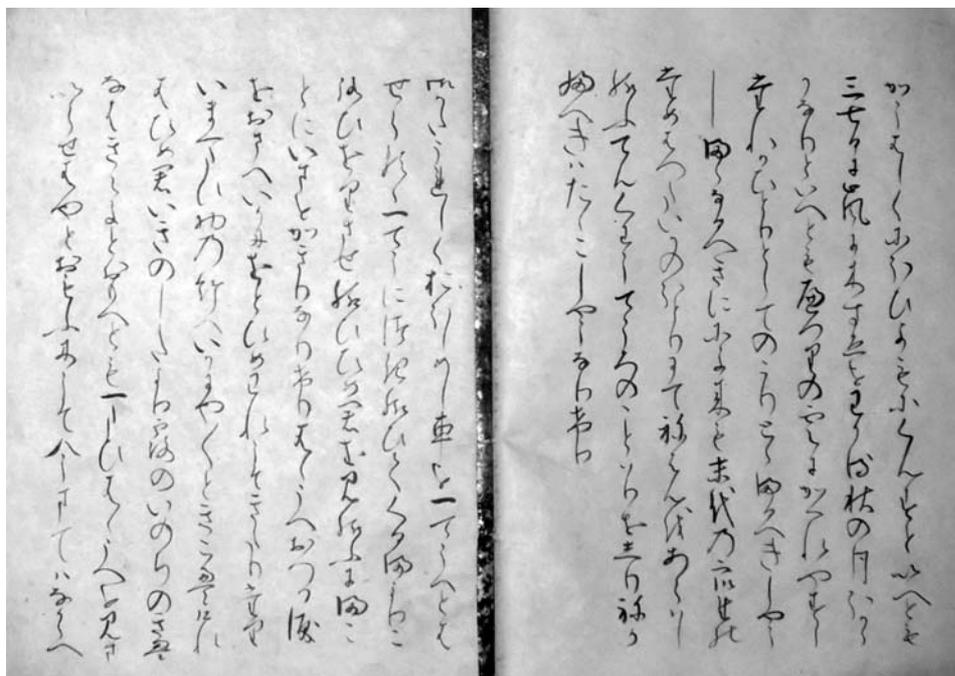


写真 C 墨付二六丁裏・二七丁表

定がされている。しかしながら、『日本書蹟大鑑』に掲載されている細川忠興の筆跡と比較する限り、この『夢物語』は細川忠興書写ではないと考えられる。

二、翻 刻

【凡例】

一、この翻刻は、中世物語『夢物語』（個人蔵）の全丁を、可能な限り原本に基づいて翻刻したものである。

二、翻刻にあたっては、次の方針に拠った。

- ・ 漢字、仮名の区別をはじめ、仮名遣、宛字等は、すべて原本通りに活字化した。
- ・ 漢字の字体は、原本における使用例に従って、旧字体あるいは略字体を使用した。
- ・ 「く」や「、」などの踊り字は、原本通りのものを用いた。
- ・ 和歌は地の文より二字下げて書き出し、末尾はそのまま地の文に続く形とした。



写真 E 極札裏面

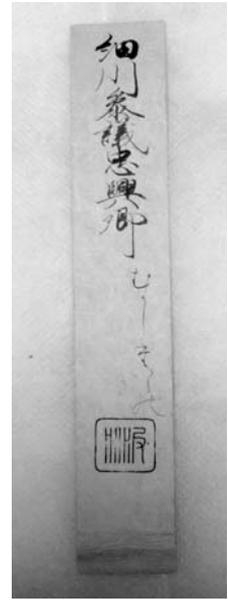


写真 D 極札表面

・ 丁数は、原本の本文が開始する丁を第一丁とし、原本の丁の表、裏が終わるごとに、「」記号を付し、その下に丁数を示す漢数字と、オ（表）・ウ（裏）を記した。但し、本書には錯簡があるので、本翻刻では正しい原型に復した順序通りに丁数を記し、その下に（ ）を付して、現状の誤った丁数を記した。

【翻刻本文】

むかしたいらの京たちはしまり嗟峨の天王の御とき三条たかくらに右大臣ときこゑし人いむおほへいみしくときめくことかきりなし御子あまたをはしますわか君三人ひめきみ二人をはしますちやくしとうのちうしやうしなむ三位のちうしやう三なむ四位の少将とそ申けるをとひめきみのうつくしさかみかたちよりはしめてこの世の人とも見え給はずち、は、いかにもしてきさきにたてはやと「一オおほしめすところに御門よりをとひめをたてまつるへきよしたひくせむしなるさるほとにとくわむはくをはしめて右大臣にかたをならふる人々のかのひめ君に心をつくさぬはなかりけりかくてあねのひめ君十七をとひめきみ十五と申八月十五夜の月のさやけきををとひめにしのはなそのにいてわこむかきならし給へは大しゆきむならかつまをとまかくやおもひしられ身にあこかれるはかりなりさる折」一ウからち、は、の御かたよりのめのとをつかいにて夜もふけぬとくいらせ給へとたひくせめきこえければちからなく月のひかりを身にとめてうちへいらせ給ひふし給ふとて

くまもなき月のひかりにさそはれて空
になりゆくわかこゝろかなとかやうにあそ
はしてうちふし給へはきちやうのうちかほり
みちて人のよりくるけしきありなにとなく

御らむすれはとしのよはひ二十はかりなる男の「二才
玉のかふりきて色しろうなをしすかた尋常
なるかいつくよりきたるともなくひめ君の

御そはにふし給へりこはいかなる事そやと
あわてさわかせ給ふらむせむせのちきりあさ
からすしてこれまでまひりて候物をとて

いにしへのちきりもふかしこの世にて二
たひ君にめぐりあひけりとかやうに詠し
給へはひめ君

いにしへのちきりはしらすこの世にてかゝる「二ウ
うきめにたれかあふへきといひすていなや
かなしやとてなきさけふとおもへは夜もあけ
ぬあたりを見るに人もなし夢なりけりと

思へは又そのうつりかは身にしみてなつかしさのあ
まりにをきあかり給はてふしてそおはしける
やうくくれぬとおもへは又さきの夜のことく
をはしけりいまはひめ君もうちとくる心して

雨のふる夜もふらぬ夜もかわせ給ひけり
さるほどに夢のうちとはいひなからとしの「三才
暮よりひめ君たゝならすなり給ふかくて

かへるとしの三月廿日あまりのことなるに
御門とうへむの御つかいにてふちかさねのうす
やうに御ふみこまくとあそはしてをくらせ

給ふ

人しれすいまやくとあふことを心のすゑ

にかゝるふしなみとあそはしてとうのへむに
給はりぬへむこれを給はりて三条たかくら
へもちてまひりこのよし申給へは右大臣大「三ウ

きによるこひきたのかたにおほせけるはかゝる
めてたき御ふみこそ候へとおほせければやかて
きたのかたもちて西のたいへうつらせ給ひひ

め君はあさましくおもひ給ひきくよりはやく
うちふし夢人のさしもいましめ給ひしは
かくわかまいらむ程はいかにかしこきせむしあり
とも御かへり事あるへからすとありし物をと

おもひたもとをかほにあてしはしはものをも
の給はすきたのかたはあきれ給ひいかにこれは「四才
めてたき御文にこそあれいそき御返事ある

へしとしゐてせめ給ひけりひめ君は、のおほ
せのをもければなくくおきあかり給ひしとけ
なけなることはのすゑに

かすならぬ身にはくもぬのさくら花心の
まつもかいやなからむとかき給へはきたのかた
是をとりてかすのひきてものとともに

とうのへむにたふ給はりてかへりまひり
そうしければ御門ふみ御らむしてあらう「四ウ
つくしの筆のあと文字のならひやそのす

かたもあらはれ御こゝろもいそかれ給へり
かくてう月三日に大臣のをとひめきさきに
たてまつるへきよしせむしありければ大臣は

ひめをきさきにたてまつる事めてたき事
なりとてよほひありけりひめ君夢人の

さしもせいし給ひし物をとむねうちさわ
きてをわしけるに夜ふくるほとに夢人を
わしけるかつねのことくもなくきちやうの
「五オ
そとにたち給ひしかしはらくありてうちへ
入うちうらみたるけしきにての給ひけるはいか
にや君さしもわか申せし事もみないたつら
になし給ふ物かないまはなにをかつ、みまいらす
へき君はむかし天王にてをわせしなりわれ
は空のあめわかひこなりそのときちきりふかく
して御身けかいにむまれ給へはいまかくあるへ
きことならねともこそ秋八月十五夜の
ことなりしにきむのねのあまりにおもしろく
「五ウ
たえかたきにひかれて浮世のちきりと
りぬされとも御身きさきにたち給ふへ
きにさたまりぬれはこれよりのちまいる事
あるへからす御なこりはかすくをしけれ
ともいま申て帰るなりとありしかはひめ君
かなしきことに思ひわれきさきにたつこと
あるへからすち、は、のおほせをそむきてた
とい命をうしなわれふきやうをかふむるとも
ちからなしとおもひさためたるわか身なり
「六オ
と、まり給へとてたもとにすかりつき給へは
たちとまりされはとよかほとにこの世の
ゑむあさからむとはしらすしてかたみを
と、めをくこそなによりかなしけれとて
わするなよしのふのふしは露けきと見
はてぬ夢ののこるかたみをときこしてその
子むまれて三とせと申さむときはよそなから

見候へたてまつらむとて涙をなかし給へは
よそなからひめもなく
「六ウ
なにせむとわすれかたみののこるらむいと、
しのふの露のしけさにときこえたもと
をかほにをしあてしはらくき、入給ひけり
やうく心をすくしとりなをし見給へは夜
もほのくとあけゆけはあたりを見れとも
その人もなし夢なりけりとかなしくて
是やさはかきりなるへきむは玉の夜く
みつる夢のかよひちとうちなかめくるれはそ
の人なつかしさに夜のをと、にいらせ給へとも
「七オ
ありしおもかけもみえ給はず又の夜もも
しやとまち給へともいまはかきたえみえ給
はねはた、物おもひのたねとこそなりけむさる
ほとにその、ち又御門より御ふみたひくまいり
けれどもこの御ふみ破にこそありし人にも
すてられければとうらめしくのみおもひて
御返事もし給はず御門はいよくあこかれ給
ひうの花かさねのうすやうに御うらみのかす
くあそはして
「七ウ
かたらはむことをいそくにほと、きすおも
はぬ枝にしひねやなくとあそはして
このたひはせうしやうしてつかはされけれとも
なを御返事もなかりけりかくてう月
十三日に内裏へいれ給ふへしとそさたまり
ける大臣はひめをみかとへたてまつる事の
めてたさにこ、をはれとよほひあり御車
十五りやうねうはうたち八十よ人をひた、

しとおろかなりすてにその日にもな」八才
 りければれむせいはしめてかいしやく
 のねうはうたちみなく御ゆとのへとそす
 すめけるされともひめ君こはなに事そや思ふ
 人にすてらるゝたにかなしきに思はぬかたへ
 といふ人のうらめしさよとおほしめしむかた
 なくてなき給ふれむせいいかに〜と申ければ
 かすかなる御こゑにてつねならぬいたわりさ
 ふらひていのちもたへかたしとはかりの
 給ひけりれむせいおほきにさはき御ふと」八ウ
 ころへ手をいれさま〜にいたわりまいらせけ
 るかた、ならぬ御身とおほえければいそぎ
 は、うへに申けりあはておはしまして
 見給ふにまことにうたかふところもなかりけり
 こはいかにいつれのねうはうたちかしりた
 るととひ給へともとより夢のうちの事
 なれはしる人もなかりけりよろつこのほ
 とけかみをかけてみな〜しらすとそち
 むしけるちゝの大臣き、給ひいかにせむとあ
 むし給へとせむかたなければ世の中に人の
 もつましき物はひめなりひめならずはなにし
 にかゝるはちをはあたふへきとあむし
 給ひそうすへきやうなかりければとりかへて
 あねのひめをまいらせむさりなからみをとる
 ところおほかりけりされともたとへはおほ
 しめしすて給ふまでもこよひのはちを
 かくさむとてあねのひめをそまいらせられ
 けるさるほどに京中の男女きせむ老若」九ウ

是を見物しけり人、申けるはあら〜おひ
 た、しの御ことやてむちくしむたむはいさし
 すわかてうあきつしまにかほといみしき事
 は又もあるへきとおほえす此人はやう〜
 中将になり給ふへき人なりしか御門のお
 ほえよきによつて大臣までのほり給ふせつ
 しやう関白になり給ふ事ほとあらしみめはさ
 いわいのななりとはかやうのことをや申
 へきとそうらやみけるかくてみうちへいらせ」一〇才
 給へは御門はよろこひかきりなかりけりともし
 火のしろきひかりに御らむすれはこのほとき
 こしめしたることくにもあらずとしのころ
 も二つ三つはかりはすきておほしめし是をは
 いかなるものかたくいあらしとは申はしめけむと
 御心のうちにおほしめしなからおとゝにいらせ
 給ひけりさて大臣はむねむのあまりにかのをと
 ひめをへむしもかなふましとていたし給ふ
 いたはしやひめ君はめのとばかりをひきく」一〇ウ
 しなく〜にしのたいをいて給ひ行とまる
 へきかたもしらねは一条わたりにめのとし
 りたるところへたちいらせ給ひけりさても
 御門はとりかへたるをはしはしめし給はず又
 夜も明はなれさるになむ殿にむませ給ひ
 けりかくておほしめしけるはさても人のいひ
 つるにはあらざる物かなもしともし火のかけ
 ゆへにやあるらむひるこそみめとおほしめしき
 さきのをわしますところいきやうかうなら」一一才
 せ給ひ御らむするにねうはうたち八十よ人

うつくしくかさりたて、さ、めきわたりければいつもの御てむなから是はたいしやくのほうてむか又は天人のあまくたり給ふかとおほしめしたちいたせ給ひきさをゑいらむ

あるにもとよりそれにあらさりければた、夜ゑいらむありしことくなり又なむ殿に行幸ありてつくくとおほしめしければかほとまてき、しに見るはをとれる物かなよし」 一一ウ
みめかたちこそかくはむへるともありし返しのもしのならひ歌の心うつくしくゑむにやさしかりしものとおほしめして御文の奥に

あひみてはうれしかるへき今朝なれと暮まつほとそくるしかりけるとかやうにあそはしときこえければやかて御返事ありけり
そのはしになむ

なにかさてくれまつほとをなけくへきあけ」 一二オ
たにはて、かへる心にとありしをゑいらむあつてみめこそき、しにたかふとも手はよもかわらしとおもひしにてもかわりたりおほつかなくおほしけれともなにとせむしあるへきやうもなくてその、ちは御ふみたにかきたえなかりければをと、つたへき、てもとよりまぢまふけたることそかしさりながら御おほえなき物をうちをきたてまつりてもいたはしき御事なりおろしまいらせはや」 一二ウ
と思はれければは、きたのかた二三日かせの心ちにてましませはをりさせ給ふへしとて御

むかひありさてをりさせ給ひてのち御めしもなかりければまゐり給ふ事もなかりけり一条にをはしけるをとひめ是をつたへき、よくそわれはまゐらさりけるたれとてもさこそあらめとの給ひけるいよく夢人の恋しさはたとへむかたはなかりけりかくてそのとの八月十五日にもなりければまことに」 一三オ
月もくまなくすみわたりけりひめ君心をすましつれなきいのちなからへて月はめぐりきたれともなれし夢路は跡たえてこそよひみそめし夢そかしとこひしくてたへかたおほしたりしか御心ちれいならすきえいらせ給へは御めのときををつふしいたきたてまつりいたはりまゐらせけれどもしたひにより給ひいきのした

よりは、うへをいま一たひ見たてまつりて」 一三ウ
ともかくもならはやとはかりにて又きえ入給へは御めのとかなしさのあまりにたかくらのきたの御かたへかくとつけたてまつりけりきたの御かたこはあさましき事かなすきしう月のころより見る事なきさへかなしきにいかなることもあらはわか身いきてもなにかせむともにきえなむとおほしめし大臣殿におほせけるはをとひめは一条わたりにしのひてはむへるなるか心れいならず」 一四オ
いまをかきりなるかは、を一め見てきえはやといふよしつけわたりさふらふなりこのうへはなにかくるしうさふらふへき御いとまを

給はり一め見て帰りまいらせむとおほせけれ
 はをと、さめくとなき給ひあまたのなかに
 このひめはみめかたち人にすくれ心さまもや
 さしく候へはとりわきふむにおもへともひ
 とつはそのときはちをおもひふきやうせし
 なりいそきをはしませとありしかはきたの」 一四ウ
 御かたうれしくおほしめし車を一てうへとは
 せらる、一てうにつき給ひてくるまよりこ
 ろひをりさせ給ひひめ君を見給ふにまこ
 とにいまをかきりなりけりは、うへおつる涙
 をおさへいかにをとひめわれこそきたりたり
 いま一たひ物の給へいかにやくときこえけれ
 はひめ君いきのしたより露のいのちのきえ
 なはきえよとおもへとも一たひは、うへを見ま
 いらせはやとおもふにこそ今まではなからへ」 一五オ (二七オ)
 て候へとの給へはは、うへもめのとのさい将も
 みな袖をかほにをしあてなくよりほかの
 事そなきや、あつては、うへた、もなき
 身なれはをこしまいらせていたはるへしと
 ありしかはさい将し、うをこしまいらせていた
 わりければ御さむたいらかにしてまことに
 玉をみかきたるかことくなるわか君むまれ
 させ給ひければ御さしきのうちもか、やく
 はかりなりきたの御かた御よろこひあり」 一五ウ (二七ウ)
 てとりあけまいらせ給ひてつからゆを
 ひかせまいらせ給ひ折ふしたかくらにへむ
 といふねうはうちをもちたりければやかて
 御めのとにそつけ給ひけるさてひめ君若

君を御らむするにありし夢人のかたち
 にすこしもたかひ給はず夢ならば夢にて
 はてもせてよしなきわすれかたみかなと
 いよくゆかしくのみそおほしけるきたの
 御かたかへらせ給ひをと、にかくとおほ」 一六オ (二八オ)
 せければ大臣このうへはちからなしとてへ
 むかかたへをみなへしのきぬにくれなる
 のはかまひめ君若君三条たかくらへいれ
 たてまつるへしとて御むかいのくるまを
 そつかはされけるへむなのめならすよろこ
 ひひめ君若君みなひとつ車にとりのり
 て三条たかくらへいり給ふ大臣は若
 君を御らむして御かほかたち常の人
 にはあらずふしきなる御事かなとて」 一六ウ (二八ウ)
 いつきかしつき給ひけりかくありしかともひ
 め君はさすかはつかしう又は夢人恋しくのみ
 おもひ給ひけりさる程に若君三さいと申
 二月御くしをきして七月わたりは御くしゆ
 らくくと御めの前におひか、り給ひらうたき
 御すかたたとへむかたはなかりけり大臣かた時
 も身はなれ給ふことなし三さいと申ながら
 た、人にあらされは常の人の五つ六つより
 なををとなくそおはしける七月七日七夕」 一七オ (二九オ)
 のあひみる日にもなりしかは大臣きたの御
 かたをはしめまいらせそのほかのねうはう
 なむはうみなくかちの葉をもちあるひは
 ふみをかきてち、には、にきやうたいなど
 のかたへとりかわしけり若君御らむしてわか

ち、のけふ御つかひあるへきなりかちの葉す、りをまいらせよとおほせければみな人これをき、あら御いたはしや人のち、もちたるをうら山しくおほしめすにこそ」一七ウ(二九ウ)とて御す、りにかちの葉をとりそへまいらせければしはしうちあむして

あまの川いかにちきりしなかなれば年に一たひあふせなるらむとかやうにあそはしけるをめのと給はりて大臣殿御ふたかたへかくと申あけたりければいとおしやみな人のち、もちたるをうらやみかくはかきつらむとて若君これへの給へは御前にまいる給ふをと、いたき給ひまことやなむちはち、をもちたる「一八オ(一五オ)

といふはいかなる人そとと給へは若君うちわらはせ給ひわれはたれよりもめてたきち、をもちてさふらふかさき程のつかひにけふ是へかならずわたらせ給ひわれをともし給ふへしひころのいしやうけからはしく候へはあたらしく候はむしやうそくたへとおほせければ大臣殿ふしきの思ひをなしいろくのしやうそくあたらしくたちかさねきせまいらせ給ふかくて若君ち、をまちたてまつらむとて「一八ウ(一五ウ)はなその山にたちいてあそひ給ひけりすてにひつしのこくになりければいなつましきりにひかりこくうにおむかくのこゑしていきやうよもにくむす人ふしきのおもひをなせは若君すわやち、のくたり給ふとてひろゑむにあかり給へはみな人ふしきなることかなとて心

をすまし見るところにいろくのひかりのなかりよりこ、ろもこと葉もおよひかたくうつくしくかさりたる玉の御こしそふりくたりける「一九オ(一六オ)さて御こしのうちよりかれうひむかの御こゑにてこれへとありければおそれたる御けしきもましまさて御こしのそはにさしより給へはまことにほひくむしうつくしくひきかさねたるうすやうにあそはしたる御ふみこれ

は、のひめきみにまいらすへしときこへければ若君給はりていそきは、うへにまいらせ給ふひめ君はわすれかたみむまれて三さいのときとありしをわすれ給ふ事もなければいそき「一九ウ(一六ウ)とりて御らむするにこまくとあそはしたりける奥に

夢にのみおもひたとりてやみしみのけふあらはる、すかたともみよとありしかは夢ともうつ、ともわきまへすいそきはしりいてさせ給へは玉の御こしのうちよりいかにいま一たひよそなからとちきりまいらせしはわすれ給ふにやとて御手をとり給へはつらきにもうれしきにもさきたつものは涙にて袖をかほにおしあて、「二〇オ(一七オ)しはしきえ入給ひけりや、あつてひめ君われ王土にありなからせむしをそむきひとりすむ事た、君ゆへはかりとの給ひくわしくいはむとすれはなみたさきたつてこゑいてすいはねはうらみのかすつきすた、なくよりほかの事もなくてやるかたなきは心なりあめわかひこの給けるはしやうしむしやうゑしやちやうりのこと

はりをよくくおほしめして御なげきありかくて
わかをけかいにおきいわうにつかへぬ人やあるへ
き十せむの御身とは申ともわか子をめしつかは
れむ事はさすかひむなき御ことなりこのつ
ゐてにつれてあかるへしとの給へはひめ君この
三とせかほときみにすてられまいらせ露の命
きえはてぬと思へともつれなくなからへて
さふらふなるにわか君をめしつれさせ給ふかし
からは命をめし給へとなげき給ひけるさる程
に大臣きたの御かたあさましき御ことかないかな
るほとけかみにてもましませわくわうとうちむ
の御しひあらはこの若君をたひ給へとていたき
給ひてゆるしたまはすあめわかひこかくて
はちこくうつりなむたはかりとらはやとおほし
めしけにく三人の御なげきもことわりなれば
此たひはかりのこしおくへしさりなからおしへ
へき事ありすこしのあいたはこなたへとの給
へはさらはとて若君を玉のこしのきわへよせ
給へは御こしのうちより御手をさしいたし若君
をうちへひきいれ給ひいろくの御しやう
二二ウ (一八ウ)

そくとりいたしめしかへさせもとの御しやうそく
をは御こしのそはにゐたりしへむのめのとにた
まはりぬ大臣きたの御かたひめ君へむこはいかな
る御事そやこのたひはかりと天にあふき地に
ふしこゑもおしますすなげき給へともかいそなき
さていなつましきりにひかり玉のみこしもゆら
めくとおもへはてむをさしてそあかりけるちうにて
かれうひむかのこゑをあけをと、きたの御かた

は、うへ此世のゑむあさくましますともかならず
ひとつはちすのうてなにうまるへし名残
おしのめのとや又こそむまれあわめとてく
も井はるかにあからせ給へは人々はちをも
人めをもかへり見すしらすにたおれふし
なき給ふありさまたとへむかたそなかり
けるさてその、ちをと、是の関白殿おほ
せあわせらるへき事ありておほしけるに
をと、きたのかたこのなげきのあまりにく
わしくはもてなしたまはさりけりひめ
二二ウ (一九ウ)

君もつねは見給ふ事あらねとも此なげき
によりてそ見え給ひけるくわむはく殿も
あはれにおもひ給ひともに袖をそしほり給ひ
けるかへらせ給ひてのち殿上へ御まいり
ありてなにとなき御物かたりのついでに大臣
のをとひめの御事ともくわしく御物かたり
ありて天のあめわかひこのくたりけるもこと
はりめいなからはしめてけむさむつかまつりて候
なるかたいとうてむちくのことほしらすわか
二二ウ (二〇ウ)
てうにむかしより末代かゝるひしむあるへ
からすかむのふていのわかれをおしみてひめ
をかへにうつしてなげきしりふしむ又玄
宗くわうていのてうあいはなはたしくて
日たけておきいてあさまつりことおこたり
給ひしやうきひとやらむもこれにはしかしと
そうし給へは御門きこしめしてされはこそ
ふしきのことくおもひしなりさやうの事
ありつるならば大臣かひかことならずい
二三ウ (二〇ウ)

まはとくくそのひめをきさきにまいらすへき
 よしせむしひまなかりけりされは大臣はかく
 てよにあらむと思ふにこそひめを御門へま
 いらせめ若君の御わかれやるかたもなきひめ
 君きたのかたとも世をいとひまことの道
 にいらはやおもひきり給へは御返事もな
 かりけり御門はいよく御なけきふかかりけるこ
 のうへはよのつかひはかなふましとおほしめし
 ちやくしとうの中将をめてち、の大臣」二四オ(二二オ)
 をいかにもなくさめをとひめをきさきにまいら
 せなむしも官位をす、み一門とも、はむし
 やうすへしちむか世にあらむほとはなむち
 かおむをわするへからすところおほせくたされ
 ければとうの中将せむしをかうふり三条に
 かへり右大臣にかくと申されければおと、な
 みたをなかし世にあらむといふにこそひめを内
 裏へまいらせめひめをいたくふひむとおもふ故
 やらむ若君てりか、やき給ひしゆへやらむ」二四ウ(二二ウ)
 その面かけひしと身にそひ心も心ならず
 これをほたいのたねとしてひめもろとも
 にまことのみちにいらむとおもふはかりなり
 おもひよらすとありしかは中将かさねて
 ひめはかり御子にてかく申中将は御子にあら
 すやうき世にも、ひやうとうなるをはおや
 あまたのこをおもふかことしとこそ申候へわれ
 をこそおほしめさすともひめをおほしめし
 候は、きさきにたて給ひくも井の御すま」二五オ(二三オ)
 いなにかおほしめす御事の候へきそのうへ

うき世をいとひまことのみちにいらせ給ふと
 もわうとにましくなからせむしをそむき
 給ふへきかといろく申させ給へはことはり
 にまけてりやうしやうし給ふちう将よろこひ
 のまゆをひらきにしたいにうつりせむし
 とおほせ、はいかにとありければひめ君なを
 おもひよらすの御事なり今はこむしやうに
 あらむともおもひ今年ともつれなき命」二五ウ(二三ウ)
 はせむかたなしかみをもそりすかたをもかへ
 仏のみちをねかは、いかてかわか君とひとつはち
 すのうてないうまれあわむとおもふはかりなり
 とてうちふしなき給ふはかりにてその、ちは
 物ものたまはすちう将あきれておほしけるかい
 かにたしかにき、給へ人間に生をうくる身
 はかならず四つのおむをうくるなり天地のおむ
 こくわうのおむふものおむ衆生のおむこれな
 りせむしをそむき給は、こくわうのおむ内」二六オ(二三オ)
 裏へまいり給はすはち、は、のおむわれをはし
 め一もむあまたのゑい花をさまたけ給は、衆
 生のおむこれらをそむき給ひまことの道に
 入しやうとをねかい給ふともこしやうはむけむ
 のくるしみをうけたしやうこうはふるとも若
 君にうまれあひ給ふ事あるへからすとさ
 まくくの給ければすこしなくさむけしき
 なり中将なのめならずよろこひていそきま
 いるかのひめをたてまつるへしとそうもむ」二六ウ(二三ウ)
 せられければ御門おほきにきよかむあつて
 吉日をゑらみ霜月五日をさためせむれいを

ひきかへてひるうつり給ふへしとせむしあ
りけりおと、めむほくをほとこしうしかいさう
しにいたるまでこ、をはれとよういありけ
りすてに十一月五日にもなりしかはみのこ
くにまいらせ給ふ御車三十りやうやりちかへ
たりかくてみかとはむかひとらせ給ひゑいらむ
あるにませのうちのしら菊かすみのうちの
かはさくらひしやもむのいもうとにきちしやう
てむによもこれ程はあらしとおほしめしたり
けりかくてひよくれむりの御かたらいあさから
すおほしめし暮をいそきあくるをかなしみ
給ひけりさるほとにきさきた、ならすおほ
せしかうつくしきまことに玉のことくなるわうし
御たむしやうありけりそれよりうちつ、き給ふ
ほとに三人まで御たむしやうありその、ちうち
つ、きひめみや二人御たむしやうありしかは
一のみや御とし十三と申には御位につかせ給ふ
二のみやとうくうにた、せ給ふ三のみやは
は兵部卿のみやとそ申ける又一のひめみやは
賀茂のさいるむつきのひめみや伊勢のさい
くうにた、せ給ひとりくにつかえ給ひけ
りしかは御ち、のおと、は関白になり給ふ
少将は三位し給ひけりかくておのく一門の人
く、数十人われもく、とくわむゐす、ませ給
ひ栄花申もおろかなりさて年月をおくり
給ふ程に三十三年の御ちきりにて三月十
三日の夜の月くまなくさなから八月のころ
かとおもふほとなるに御門ほうきよなりぬ

あくる春にもなりしかは女院は南殿のおほ
ゆかにをりさせ給ひすきにしかた行すゑを
おほしめしつ、け花をなかめ歌を詠し
心ほそくおほしめしてくれゆく空を御らむす
る折ふし雲井の月のひかりかとおほしめし
ければいろく、のひかりさして玉の御こしふり
くたり御こしのうちよりけたかき御こゑにていかに
あめわかひここそこれまで御むかひにまいりて
候へわすれかたみもつねにこひしくなり申なり
とくく、おはしますへきなりそのま、御とも申
たく侍れとも御身はほむふにけれ給へは
思ふにかひなしときこえてこしは天にそあ
かりけるそれより御こ、ろれいならずある日の
くれほとにわうしやうをとけ給ふふしきの
御事ともなりしされは春の花は木すゑに
かうはしくにほひよもにくむすといへとも
三七日に嵐に木すゑをわかる秋の月ほから
かなりといへともへつりの雲にかくれやすし
たれかひとりとしてのこりと、まるへきしやう
しま、なるへきによ来も末代の衆生の
ためはつたいかのほとりにてねはむをあらはし
給ふてむくわうてうろのことほりをしりねか
ふへきはた、こしやうなりけり
「二八九ウ(二六ウ)

(二五ウ)

(二六ウ)

(二七ウ)

(二八ウ)

(二九ウ)

(三〇ウ)

(三一ウ)

(三二ウ)

(三三ウ)

(三四ウ)

(三五ウ)

(三六ウ)

(三七ウ)

(三八ウ)

(三九ウ)

(四〇ウ)

(四一ウ)

(四二ウ)

(四三ウ)

(四四ウ)

(四五ウ)

(四六ウ)

(四七ウ)

(四八ウ)

(四九ウ)

(五〇ウ)

(五一ウ)

(五二ウ)

(五三ウ)

(五四ウ)

(五五ウ)

(五六ウ)

(五七ウ)

(五八ウ)

(五九ウ)

(六〇ウ)

(六一ウ)

(六二ウ)

(六三ウ)

(六四ウ)

(六五ウ)

(六六ウ)

(六七ウ)

(六八ウ)

(六九ウ)

(七〇ウ)

(七一ウ)

(七二ウ)

(七三ウ)

(七四ウ)

(七五ウ)

(七六ウ)

(七七ウ)

(七八ウ)

(七九ウ)

(八〇ウ)

(八一ウ)

(八二ウ)

(八三ウ)

(八四ウ)

(八五ウ)

(八六ウ)

(八七ウ)

(八八ウ)

(八九ウ)

(九〇ウ)

(九一ウ)

(九二ウ)

(九三ウ)

(九四ウ)

(九五ウ)

(九六ウ)

(九七ウ)

(九八ウ)

(九九ウ)

(一〇〇ウ)

三、鑑賞本文

【凡例】

一、この鑑賞本文は、中世物語『夢物語』（個人蔵）を、前出の翻刻に基づき、鑑賞本文としたものである。

二、鑑賞本文にあたっては、次の方針に拠った。

- ・漢字、仮名の区別をはじめ、仮名遣、宛字等は、現行通用の字体に改めた。
- ・読みやすさのため仮名を適当な漢字に改めたが、煩雑さを避けるために元の仮名をルビとして残さなかつた箇所もある。適宜「二、翻刻」を参照されたい。
- ・読みやすさのため濁音を表記し、段落、句読点を設けた。
- ・「よつて」などの促音便は小さく改めた。
- ・「く」や「、」などの踊り字は適当な漢字、仮名に改めた。
- ・「物」などが助詞として用いられている場合、仮名に改めた。
- ・「又」などの、接頭語と判断できるものも出来る限り仮名に改めてある。
- ・脱字を補った場合は、その右側に記号「・」を付した。
- ・衍字と思しき箇所については、記号「・」を付し、その右側に原本に書かれていた文字を記した。
- ・会話文は、原則として、「」をつけて示した。
- ・和歌は地の文より二字下げて書き出した。
- ・注釈を設ける場合は、文字の右上に（二）のような山括弧と漢数字を付与した。
- ・丁数は、原本の本文が開始する丁を第一丁とし、原本の丁の表、裏が終わるごとに、その下に丁数を示す漢数字と、オ（表）・ウ（裏）を記した。但し、本書には錯簡があるので、本鑑賞本文では正しい原型に復した順序通りに丁数を記し、その下に（ ）を付して現状の誤った丁数を記した。

【鑑賞本文】

昔、平の京たちはじまり、嵯峨の天皇の御時、三条高倉に右大臣と聞こえし人、院のおぼえいみじくときめくこと限りなし。御子あまたおはします。若君三人、姫君二人おはします。嫡子頭の中將、次男三位の中將、三男四位の少將とぞ申しける妹姫君の美しさ、髪容貌よりはじめて、この世の人とも見え給はず。父母いかにもして后に立てばやとおぼしめすところに、帝より妹姫を奉るべきよしたびたび宣旨なる。さる程に頭、関白をはじめて右大臣に肩を並ぶる人々の、かの姫君に心をつくさぬはなかりけり。

かくて姉の姫君十七、妹姫君十五と申す。八月十五夜の月のさやけきに妹姫西の花園に出で、和琴かきならし給へば、大樹緊那羅が爪音もかくやと思ひしられ、身にあこがれるばかりなり。さる折から父母の御方より乳母を使いにて夜も更けぬ。とくいらせ給へとたびたび責め聞こえければ、力なく月の光を身にとめて内へ入らせ給ひ、伏し給ふとて、

くまもなき月の光にさそはれて空になりゆくわが心
かな

とかやうにあそばしてうち伏し給へば、几帳の内かほり満ちて人の寄り来る気色あり。なにとなく御覧すれば、年の齡二十ばかりなる男の、玉の冠着て色白う直衣姿尋常なるが、いづくより来るともなく姫君の御側に伏し給へり。「こはいかなる事ぞや」と慌て騒がせ給ふらむ。前世の契り浅からずして、これまで参りて候ふものをとて、

いにしへの契りも深しこの世にて二たび君にめぐり

一オ

一ウ

二オ

あひけり

とかやうに詠じ給へば、姫君、

いにしへの契りは知らずこの世にてかかる憂きめに

二ウ

たれかあふべき

と言ひすて「いなや、かなしや」とて泣きさけぶと思へば夜も明けぬ。あたりを見るに人もなし。夢なりけりと思へば、またその移り香は身にしてみても、なつかしさのあまりに起き上がり給はで伏してぞおはしける。やうやう暮れぬと思へば、またさきの夜のごとくおはしけり。今は姫君もうちとくる心して、雨の降る夜も降らぬ夜も通はせ給ひけり。さる程に夢の中とは言ひながら、年の暮より姫君ただならずなり給ふ。

三オ

かくて、返る年の三月廿日あまりのことなるに、帝、頭の弁の御使ひにて藤襲の薄様に御文こまごまとあそばして、おくらせ給ふ。

人知れず今や今やとあふことを心の末にかかる藤波とあそばして、頭の弁に給はりぬ。弁、これを給はりて三条高倉へ持ちて参り、このよし申し給へば、右大臣大さによるこび、北の方におほせけるは、「かかるめでたき御文こそ候へ」とおほせければ、やがて北の方持ちて

三ウ

西の対へ移らせ給ひ、姫君はあさましく思ひ給ひ、聞くよりはやくうち伏し、夢人のさしも戒め給ひしは、かく我が参らむ程は、いかにかしこき宣旨ありとも、御返事あるべからずとありしものと思ひ、たもとを顔にあてしばしばものをものたまはず、北の方はあきれ給ひ、「いかにこれはめでたき御文にこそあれいそぎ御返事あるべし」としひて責め給ひけり。姫君母のおほせの重ければ、泣く泣く起き上がり給ひ、しどけなげなる言葉の

四オ

末に、

数ならぬ身には雲井の桜花心のまつもかひやなから

む

と書き給へば、北の方これとりて、数の引出物とともに頭の弁に賜ふ。給はりて、帰り参り奏しければ、帝、文御覽じて、あらうつくしの筆の跡、文字の並びやその姿もあらはれ、御心もいそがれ給へり。

四ウ

かくて卯月三日に、大臣の妹姫后に奉るべきよし、宣旨ありければ、大臣は「姫を后に奉る事、めでたき事なり」とて用意ありけり。姫君「夢人のさしも制し給ひしものを」と胸うち騒ぎておはしけるに、夜ふくる程に、夢人おはしけるが、常のごとくもなく几帳の外に立ち給ひしが、しばらくありて内へ入りうち恨みたる気色にてのたまひけるは、「いかにや、君、さしも我が申せし事も、みないたづらになし給ふものかな。今は何をかつつみ参らすべき。君は昔、天王にておはせしなり。我れは空のあめわかひこなり。その時契り深くして、御身下界に生まれ給へば、今かくあるべきことならねども、去年の秋、八月十五夜のことなりしに、琴の音のあまりにおもしろくたえがたきにひかれて浮世の契りとなりぬ。されども、御身后にたち給ふべきに定まりぬれば、これより後参る事あるべからず。御なごりは数々惜しけれども、今申して帰るなり」とありしかば、姫君かなしきことと思ひ、「我れ、后にたつことあるべからず。父母のおほせを背きて、たとひ命を失はれ不孝を被るとも、力なしと思ひ定めたる我が身なり。とどまり給へ」とて、たもとにすがりつき給へば、立ちどまり、「さればとよ。かほどにこの世の縁浅からむとは知らずして、形見をと

六オ

五オ

五ウ

どめ置くこそ何よりかなしけれ」とて、

忘るなよしのぶの草は露けきと見はてぬ夢ののこる

形見を

と聞こして、「その子生まれて三歳と申さむときは、よそながら見候へ奉らむ」とて、涙を流し給へば、よそながら姫も泣く泣く、

何せむと忘れ形見の残るらむいとどしのぶの露のしげさに

と聞こえ、たもとを顔に押しあて、しばらく聞き入り給ひけり。やうやう心をすぐし、とりなほし見給へば、夜もほのぼのと明けゆけば、あたりを見れどもその人もなし。夢なりけりとかなしくて、

これやさは限りなるべきむば玉の夜々みつる夢の通ひ路

とうちながめ、暮るればその人なつかしさに夜の大殿にいらせ給へども、ありしおもかげも見え給はず。またの夜も、もしやと待ち給へども、今はかき絶え見え給はねば、ただ物思ひの種とこそなりけむ。

さる程に、その後また帝より御文たびたび参りけれども、この御文破れにこそ、ありし人にも捨てられければと、恨めしくのみ思ひて御返事もし給はず。帝はいよいよあこがれ給ひ、卯の花襲の薄様に、御恨みの数々あそばして、

かたらはむことをいそぐにほととぎす思はぬ枝にし

のびねやなく
とあそばして、この度は少丞して遣はされけれども、なほ御返事もなかりけり。

かくて、卯月十三日に、内裏へ入れ給ふべしとぞ定ま

六ウ

七オ

七ウ

りける。大臣は姫を帝へ奉る事のためたさに、ここを晴れと用意あり。御車十五両、女房たち八十余人、おびただしともおろかなり。すでにその日にもなりければ、

れむせいはじめて介錯の女房たち、みなみな御湯殿へとぞすすめける。されども姫君、「こは何事ぞや。思ふ人に捨てらるるだにかなしきに、思はぬ方へと言ふ人の恨めしさよ」とおぼしめし、せむかたなくて泣き給ふ。

れむせい「いかにいかに」と申しければ、かすかなる御声にて、「常ならぬいたはりさぶらひて、命も絶へがたし」とばかりのたまひけり。れむせい大きにさわぎ、御ふところへ手を入れ、さまさまにいたはり参らせけるが、ただならぬ御身とおほえければ、いそぎ母上に申しけり。慌ておはしまして見給ふに、まことに疑ふところもなかりけり。「こはいかに、いづれの女房たちか知りたる」と問ひ給へども、もとより夢の中の事なれば、知る人もなかりけり。よろづの仏神をかけて、みなみな知らずとぞ陳じける。父の大臣聞き給ひ、いかにせむと案じ給へど、せむかたなければ、「世の中に人の持つまじきものは姫なり。姫ならずは、何しにかかる恥をばあ

たふべき」と案じ給ひ、奏すべきやうなかりければ、「とり換へて姉の姫を参らせむ。さりながら見劣るところおほかりけり。されども、たとへばおぼしめし捨て給ふまでも、今宵の恥を隠さむ」とて、姉の姫をぞ参らせられける。

さる程に、京中の男女貴賤老若、これを見物しけり。人々申しけるは、「あらあら、おびただしの御ことや。天竺震旦はいざ知らず、我が朝秋津島にかほどいみじきことはまたもあるべきとおほえず。この人はやうやう

八オ

八ウ

九オ

九ウ

中將になり給ふべき人なりしが、帝のおほえよきによつて、大臣までのほり給ふ。摂政閑白になり給ふこと程あらじ。見目は幸いの花なりとは、かやうのことをや申すべき」とぞうらやみける。

かくて・内裏へ入らせ給へば、帝はよろこび限りなかりけり。灯火の白き光に御覧すれば、この程聞こしめしたるごとくにもあらず、歳のころも二つ三つばかりは過ぎておほしめし、これをばいかなるものか、類あらじとは申しはじめけむ、と御心のうちにおほしめしながら、大臣に率らせ給ひけり。

さて、大臣は無念のあまりに、かの妹姫を片時もかなふまじとて出だし給ふ。いたはしや、姫君は乳母ばかりを引き具し、泣く泣く西の対を出で給ひ、いきとまるべきかたも知らねば、一条辺りに乳母知りたるころへ立ち入らせ給ひけり。

さても帝はとり換へたるをば、しばし召し給はず。また、夜も明けはなれざるに南殿にむませ給ひけり。かくておほしめしけるは、さても人の言ひつるにはあらざるものかな。もし、灯火の影ゆゑにやあるらむ。昼こそ見めとおほしめし、后のおはしますところに行幸ならせ給ひ御覧するに、女房たち八十余人、うつくしくかざりたててさざめきわたりければ、いつもの御殿ながら、これは帝釈の宝殿か、または天人のあまくだり給ふかとおほしめし、たち入らせ給ひ后を御覧あるに、もとよりそれにあらざりければ、ただ夜御覧ありしごとくなり。

また、南殿に行幸ありてつくづくとおほしめしければ、「かほごまで聞きしに見るは劣れるものかな。よしよし見目容貌こそかくはむべるとも、ありし返事の文字

一〇オ

一〇ウ

一一オ

一一ウ

の並び、歌の心うつくしく艶にやさしかりしものを」とおほしめして、御文の奥に、

あひみてはうれしかるべき今朝なれど暮れまつほどぞくるしかりける

とかやうにあそばして聞こえければ、やがて御返事ありけり。その端になむ、

なにかさて暮れまつほどを嘆くべきあけだにはてでかへる心に

とありしを御覧あつて、見目こそ聞きしにたがふとも、手はよもかはらじと思ひしにてもかはりたり。おほつかなかくおほしけれども、なにと宣旨あるべきやうもなく、その後は御文だにかき絶えなかりければ、大臣伝へ聞きて、もとより待ちまうけたることぞかし。さりながら御覚えなきものを、内に置き奉りてもいたはしき御事なり。下ろし参らせばやと思はれければ、母北の方、二三日風邪の心地にてましますば、下りさせ給ふべしとて御迎ひあり。さて下りさせ給ひて後、御召しもなかりければ、参り給ふ事もなかりけり。一条におはしける妹姫これを伝へ聞き、「よくぞ我れは参らざりける。たれともさこそあらめ」とのたまひける。いよいよ夢人の恋しきは、たとへむかたはなかりけり。

かくてその年の八月十五日にもなりければ、まことに月もくまなく澄みわたりけり。姫君心を澄まし、つれなき命ながらへて、月はめぐり来れども、なれし夢路は跡絶えて、去年の今宵見初めし夢ぞかしと恋しくて、たへがたくおほしたりしが、御心地例ならず消え入らせ給へば、御乳母肝をつぶし抱き奉り、いたはり参らせけれども、次第に弱り給ひ、息の下より、母上を今一度見奉り

一一オ

一一ウ

一二オ

てともかくもならばやとばかりにて、また消え入り給へば、御乳母かなしきのあまりに、高倉の北の御方へかくと告げ奉りけり。北の御方、こはあさましき事かな。過ぎし卯月のころより見る事なきさへかなしきに、いかなることもあらば、我が身生きても何かせむ。ともに消えなむとおほしめし、大臣殿におほせけるは、「妹姫は一条なりに忍びて侍るなるが、心例ならず今を限りなるが、母を一目見て消えばやと言ふよし、告げ渡りさぶらふなり。このうへは何か苦しうさぶらふべき。御いとまを給はり、一目見て帰り参らせむ」とおほせければ、大臣さめざめと泣き給ひ、「あまたのなかにこの姫は、見目容貌人にすぐれ、心様もやさしく候へば、とりわき不憫に思へども、一つはそのときの恥を思ひ不孝せしなり。いそぎおはしませ」とありしかば、北の御方うれしくおほしめし、車を一条へとばせらるる。

一条に着き給ひて、車よりころび降りさせ給ひ、姫君を見給ふに、まことに今を限りなりけり。母上落つる涙を抑へ、「いかに妹姫、我れこそきたり・・。今一たびものたまへ、いかにやいかにや」と聞こえければ、姫君息の下より、「露の命の消えなば消えよと思へども、一たび母上を見参らせばやと思ふにこそ、今まではながらへて候へ」とのたまへば、母上も乳母の宰相も、みな袖を顔に押しあて泣くより外の事ぞなき。やあつて、母上「ただもなき身なれば、起こし参らせていたはるべし」とありしかば、宰相侍従、起こし参らせていたはりければ、御産たいらかにして、まことに玉を磨きたるがごとくなる若君生まれさせ給ひければ、御座敷のうちも輝くばかりなり。北の御方、御よろこびありてとりあげ

(一三ウ)

一四オ

一四ウ

一五オ (二七オ)

十五ウ (二七ウ)

参らせ給ひて、手づから湯を引かせ参らせ給ひ、折ふし高倉に弁といふ女房、乳をもちたりければ、やがて御乳母にぞつけ給ひける。さて姫君、若君を御覧するに、ありし夢人の容貌にすこしもたがひ給はず。夢ならば夢にて果てもせで、よしなき忘れ形見かなと、いよいよゆくのみぞおほしける。北の御方帰らせ給ひ、大臣にかくとおほせければ、大臣このうへは力なしとて、弁が方へ、女郎花の衣に紅のはかま、姫君若君、三条高倉へ入れ奉るべしとて、御迎ひの車をぞ遣はされける。弁、なのめならずよろこび、姫君若君みな一つ車にとり乗りて、三条高倉へ入り給ふ。大臣は若君を御覧して、「御容貌、常の人にはあらず。不思議なる御事かな」とて、いつきかしづき給ひけり。かくありしかども、姫君はさすがに恥づかしう、または夢人恋しくのみ思ひ給ひけり。

一六オ (二八オ)

一六ウ (二八ウ)

さる程に、若君三歳と申す。二月御ぐしおきして、七月わたりは御ぐしゆらゆらと御目の前に生ひかかり給ひ、らうたき御姿、たとへむかたはなかりけり。大臣、かた時も身離れ給ふことなし。三歳と申しながら、ただ人にあらざれば、常の人の五つ六つよりなほ大人しくぞおほしける。

一七オ (二九オ)

七月七日、七夕のあひみる日にもなりしかば、大臣北の御方をはじめ参らせ、その外の女房男房、みなみな梶の葉を持ち、あるひは文を書きて、父母に兄妹などの方へとりかはしけり。若君御覧じて、「我が父の今日御遣ひあるべきなり。梶の葉、硯を参らせよ」とおほせければ、みな人これを聞き、「あら御いたはしや。人の父持ちたるをうらやましくおほしめすにこそ」とて、御硯に

一七ウ (二九ウ)

梶の葉をとりそへ参らせければ、しばしうち案じて、

あまの川いかに契りし仲なれば年に一たびあふせなるらむ

とかやうにあそばしけるを、乳母給はりて、大臣殿御二方へかくと申し上げたりければ、「いとほしや。みな人の父持ちたるをうらやみ、かくは搔き付らむ」とて、「若君、これへ」とのたまへば、御前に参り給ふ。大殿抱き給ひ、「まことや、汝は父を持ちたると言ふはいかなる人ぞ」と問ひ給へば、若君うち笑わせ給ひ、「我れはたれよりもめでたき父を持ちてさぶらふが、さき程の遣ひに今日これへ必ず渡らせ給ひ、我をともし給ふべし。日ごろの衣装けがらはしく候へば、あたらしく候はむ装束賜べ」とおほせければ、大臣殿、不思議の思ひをなし、いろいろの装束あたらしくたち重ね着せ参らせ給ふ。かくて若君、父を待ち奉らむとて、花園山に立ち出で遊び給ひけり。すでに未の刻になりければ、稲妻しきりに光り、虚空に音楽の声して異香四方に薫ず。人、不思議の思ひをなせば、若君「はや、父の下り給ふ」とて広縁(三三)に上がり給へば、みな人「不思議なることかな」とて心を澄まし見るところに、いろいろの光の中より、心も言葉もおよびがたく、うつくしくかざりたる玉の御輿(三四)ぞふり下りける。さて、御輿のうちより、迦陵頻伽(三五)の御声にて「これへ」とありければ、おそれたる御気色もましまさで、御輿のそばにさし寄り給へば、まことに匂ひ薫じうつくしくひき重ねたる薄様にあそばしたる御文、

一八オ (一五オ)

「これ、母の姫君に参らすべし」と聞こへければ、若君給はりて、いそぎ母上に参らせ給ふ。姫君は、忘れ形見生まれて三歳のときとありしを忘れ給ふ事もなければ、

一九ウ (二五ウ)

いそぎとりて御覧するに、こまごまとあそばしたりける奥に、

一九オ (二六オ)

夢にのみ思ひたどりてやみし身の今日あらはるる姿ともみよ

一九ウ (二六ウ)

とありしかば、夢とも現ともわきまへず、いそぎ走り出でさせ給へば、玉の御輿のうちより、「いかにも、今一たびよそながらと契り参らせしは、忘れ給ふにや」とて御手をとり給へば、つらきにもうれしきにも先立つものは涙にて、袖を顔に押しあてて、しばし消え入り給ひけり。ややあつて、姫君「我れ王土(三六)にありながら宣旨を背きひとり住む事、ただ君ゆえばかり」とのたまひ、くわしく言はむとすれば、涙先立つて声出でず、言はねば恨みの数つぎ、ただ泣くより外の事もなくて、やるかたなきは心なり。あめわかひこのたまけるは、「生死無常(三七)会者定離の理をよくよくおぼしめて御嘆きあり。かくてわが(三八)を下界におき(三九)医王(四〇)に仕へぬ人があるべき。十善の御身(四一)とは申せども、我が子を召し遣はれむ事は、さすがに憫なき御事なり。このついでにつれて上がるべし」とのたまへば、姫君「この三年が程、君に捨てられ参らせ、露の命消え果てぬと思へども、つれなくながらへてさぶらふなるに、若君を召し連れさせ給ふか。しからば命を召し給へ」と嘆き給ひける。さる程に、大臣、北の御方「あさましき御ことかな。いかなる仏神(四二)にてもましませ、和光同塵(四三)の御慈悲あらば、この若君を賜び給へ」と抱き給ひてゆるし給はず。あめわかひこ、かくては時刻(四四)移りなむ、謀りたらばやおほしめし、「げにげに、三人の御嘆きもことわりなれば、此のたびばかり残しておくべし。さりながら、教ふべき事あり。すこしの

二〇オ (二七オ)

二〇ウ (二七ウ)

二二オ (二八オ)

間は「こなたへ」とのたまへば、「さらば」とて若君を玉の輿の際へ寄せ給へば、御輿のうちより御手をさし出だし、若君をうちへひき入れ給ひ、いろいろの御装束とり出だし召しかえさせ、もとの御装束をば、御輿のそばにゐたりし弁の乳母にたまはりぬ。大臣、北の御方、姫君、弁、「こはいかなる御事ぞや。このたびばかり」と天に仰ぎ地に伏し、声も惜しまず嘆き給へどもかひぞなき。さて、稲妻しきりに光り、玉の御輿もゆらめくと思へば、天をさしてぞ上がりける。宙にて迦陵頻伽の声をあげ、「大臣、北の御方、母上、この世の縁浅くましますとも、必ず一つ蓮の台に生まるべし。名残惜しの乳母や、またこそ生まれあはめ」とて、雲井はるかに上からせ給へば、人々恥をも人目をもかへり見ず、知らずにおれ伏し泣き給ふありさま、たとへむかたぞなかりける。

二二ウ（二八ウ）

二二オ（二九オ）

さて、その後、大臣この関白殿おほせあはせらるべき事ありておはしけるに、大臣、北の方、この嘆きのあまりにくわしくはもてなし給はざりけり。姫君も常は見給ふ事あらねども、この嘆きによりてぞ見え給ひける。関白殿もあはれに思ひ給ひ、ともに袖をぞしほり給ひける。かへらせ給ひて後、殿上へ御参りありて、なにとなき御物語りのついでに、大臣の妹姫の御事ども、くわしく御物語りありて、「天のあめわかひこの下りけるも理めきながら、はじめて見参つかまつりて候なるが、大唐天竺のことは知らず、我が朝に昔より末代かかる美人あるべからず。漢の武帝の別れを惜しみて、姫を壁に写して嘆きし李夫人、また、玄宗皇帝の寵愛はなはだしく

二二ウ（二九ウ）

二三オ（二〇オ）

て、日たけて起き出で、朝まつりごと怠り給ひし楊貴妃

とやらむも、これにはしかじ」と奏し給へば、帝聞こしめして、「さればこそ、不思議のごとく思ひしなり。さやうの事ありつるならば、大臣がひがごとならず。今はとくとくその姫を後に参らすべき」よし、宣旨ひまなかりけり。されば大臣は、かくてよにあらむと思ふにこそ姫を帝へ参らせめ。若君の御別れ、やるかたもなき。姫君、北の方ともに世をいとひ、真の道に入らばやと思ひ

二三ウ（二〇ウ）

さき給へば、御返事もなかりけり。帝はいよいよ御嘆き深かりける。このうへは余の使ひはかなふまじとおぼしめし、嫡子頭の中将を召して、「父の大臣をいかにもなぐさめ、妹姫を後に参らせ、汝も官位をすすみ、一門どもも繁盛すべし。朕が世にあらむほどは汝が恩を忘るべからず」とこそおほせくだされければ、頭の中将、宣旨をかうぶり三条にかへり、右大臣にかくと申されければ、大臣涙を流し、「世にあらむと言ふにこそ、姫を内裏へ参らせめ。姫をいたく不憫と思ふゆえやらむ、若君

二四オ（二二オ）

てり輝き給ひしゆえやらむ、その面影ひと身にそひ心も心ならず。これを菩提の種として、姫もろとも真の道に入らむと思ふばかりなり。思ひよらず」とありしかば、中将かさねて、「姫ばかり御子にてかく申す、中将は御子にあらずや。うき世にももの平等なるをば、親あまたの子を思ふがごとしとこそ申し候へ。我れをこそおほしめさずとも、姫をおほしめし候はば、后にたて給ひ、雲井の御住まい、なにかおほしめす御事の候べき。そのうへうき世をいとひ、真の道に入らせ給ふとも、王土にましまししながら宣旨を背き給ふべきか」といろいろに申させ給へば、理にまげて了承し給ふ。中将よろこびの眉をひらき、西の対にうつり、「宣旨とおほせしは、

二四ウ（二二ウ）

そのうへうき世をいとひ、真の道に入らせ給ふとも、王土にましまし

二五オ（二二オ）

に申させ給へば、理にまげて了承し給ふ。中将よろこびの眉をひらき、西の対にうつり、「宣旨とおほせしは、

「いかに」とありければ、姫君、「なほ思ひよらずの御事なり。今は今生にあらむとも思ひ、今年ともつれなき命はせむかたなし。髪をもそり、姿をもかへ、仏の道をおぼはば、いかでか若君と一つ蓮の台に生まれあはむと思ふばかりなり」とてうち伏し泣き給ふばかりにて、その後はものものたまはず。中将あきれておはしけるが、「いかに、たしかに聞き給へ。人間に生をうくる身は必ず四つ(四五)の恩を受くるなり。天地の恩、国王の恩、父母の恩、衆生の恩これなり。宣旨を背き給はば国王の恩、内裏へ参り給はずは父母の恩、我れをはじめ一門あまたの栄華をさまたげ給はばも衆生の恩、これらを背き給ひ、真の道に入り、浄土をねがい給ふとも、後生は無間(四五)のくろしみをうけ、多生曠劫(五〇)はふるとも、若君に生まれあひ給ふ事あるべからず」とさまざまにのたまひければ、すこしなぐさむ気色なり。中将なのめならずよるこびて、いそぎ参る。「かの姫を奉るべし」と奏聞せられければ、帝おほきに御感あつて、吉日をえらび霜月五日をさだめ、先例をひきかへて昼うつり給ふべしと宣旨ありけり。大臣、面目をほどこし、牛飼雑仕にいたるまで、ここを晴れと用意ありけり。

すでに、十一月五日にもなりしかば、巳の刻に参らせ給ふ。御車三十両遣りちがへたり。かくて帝は、迎ひとらせ給ひ観覧あるに、籬(ませ)のうちの白菊、かすみのうちの榊(かほぞら)、毘沙門(五)の妹に吉祥天女(五二)もこれ程はあらじとおぼしめしたりけり。かくて比翼連理(ひよくれむり)の御語らいあさからずおぼしめし、暮れをいそぎ明るをかなしみ給ひけり。さる程に、后ただならずおはせしが、うつくしき、まことに玉のごとくなる皇子御誕生ありけり。それよりうち

二二五ウ (二二ウ)

二六オ (二三オ)

二六ウ (二三ウ)

二七オ (二四オ)

つづき給ふほどに、三人までも御誕生あり。その後うちつづき姫宮二人御誕生あり。しかれば、一の宮御歳十三と申すには御位につかせ給ふ。二の宮、東宮にたたせ給ふ。三の宮をば兵部卿の宮とぞ申しける。また、一の姫宮は賀茂の齋院、つぎの姫宮伊勢の齋宮にたたせ給ひ、とりどりにつかえ給ひけり。しかれば、御父の大臣は関白になり給ふ。少将は三位し給ひけり。かくておのおの一門の人々数十人、われもわれもと官位すすませ給ひ、栄華申すもおろかなり。

さて、年月をおくり給ふ程に、三十三年の御契りにて、三月十三日の夜の月くまなく、さながら八月のころかと思ふ程なるに帝崩御なりぬ。あくる春にもなりしかば、女院は南殿(五三)の大床(ゆか)に居りさせ給ひ、過ぎにしかた、行すゑをおぼしめしつづけ、花をながめ歌を詠じ、心ほそくおぼしめして暮れゆく空を御覧する折ふし、雲井の月の光かとおぼしめしければ、いろいろの光さして、玉の御輿ふり下り。御輿のうちよりけだかき御声にて、「いかに、あめわかひこそ、これまで御迎ひに参りて候へ。忘れ形見も常に恋しくなり申すなり。とくとくおはしますべきなり。そのまま御供申したく侍れども、御身は凡夫(五四)にけがれ給へば、思ふにかひなし」と聞こえて、輿は天にぞあがりける。それより御心例ならず、ある日の暮れほどに往生をとげ給ふ。不思議の御事どもなりし。されば春の花は木末にかうばしくにほひ、四方に薫ずといへども、三七日(五五)に嵐に木末をわかる、秋の月ほがらかなりといへども、別離の雲にかくれやすし。たれかひとりとしてのこりとどまるべき、生死ままなるべきに、如来(五六)も末代の衆生のため、跋提河(はつたいか)のほとりにて涅槃(ねはん)

二七ウ (二四ウ)

二八オ (二五オ)

二八ウ (二五ウ)

二九オ (二六オ)

をあらはし給ふ。電光朝露の理を知りねがふべきは、ただ後生なりけり。^(五七)

二九ウ (二六ウ)

【注釈】

- 〔一〕平の京：平安京。京都。「かくて得業北条殿に具せられて、平の京へ出て給ふ。」〔義経記〕卷六
- 〔二〕三条高倉：現在の京都市中京区の東側。三条通りと高倉通りが交差するあたり。
- 〔三〕嫡子、次男、三男：嫡子は、その家の身分、財産を継承する地位に定められている者。次男や三男はそれに続いて生まれた男子を指す。「嫡子重盛、次男基盛、三男宗盛以下の一門卅余騎、大將軍をば矢面に立てじと、我先きに我先きにとぞ駆けたりける。」〔平治物語〕
- 〔四〕大樹緊那羅が爪音：緊那羅は、仏法守護の八部衆の一つ。歌舞をもつて帝釈天に仕えるもの。爪音は、琴を琴爪または指で弾く音。琴の音色。「香山大樹緊那羅の瑠璃の琴になぞらへて」〔栄花物語〕卷一七、「香山大樹緊那羅が 瑠璃の琴には摩訶迦葉 や三衣の袂に従ひて 草木も四方にぞ靡きける」〔梁塵秘抄〕卷第二、「箏の琴を盤渉調に調べて、いまめかしく掻い弾ひたる爪音、かどなきにはあらねど」〔源氏物語〕帚木
- 〔五〕くまもなき：妹姫君独詠。「空になりゆく」は、次第にうわの空になる意。
- 〔六〕いにしへの契りも：齢二十ばかりなる男贈詠。「齢二十ばかりなる男」は、のちの「あめわかひこ」(五丁裏参照)。「二たび」とは、前世と現世のこと。
- 〔七〕いにしへの契りは：妹姫君答詠。
- 〔八〕人知れず：帝贈詠。底本「心のすゑ」とあるが、「心の末」は、「心が移り行く先。将来の心の状態。」の意(『日本国語大辞典』)であり、意味が通じない。他本はいずれも「こゝろのまつ」とある。また、この歌に対する返歌の三句目に「心のまつ」という言葉がみられることから「すゑ」を「まつ」と改めた。「松」↓「まつ」↓「末」↓「すゑ」と誤写されたか。また、「藤波」は、藤の花房が風に揺れるさまを、波と連想した歌語。
- 〔九〕数ならぬ：妹姫君答詠。「雲井の桜」は、宮中にある桜の意。この歌は、『風葉和歌集』一一八一番歌「数ならぬ身には雲の藤の花ころの松もいかがしるべき」と類似している。底本「さくら花」とあるが、他本では「ふちの花」とある。
- 〔一〇〕天王：欲界六天の最下天、四天王を指すか。
- 〔一一〕あめわかひこ：八月十五夜、妹姫君の夢の中に現れた男の名。「天上の日神の許から派遣されて降臨する若日子(若い神)の意。」〔角川古語大辞典〕また、『うつほ物語』『狭衣物語』には、「天稚御子」の名で、音楽の神として天降ることが記されている。「阿修羅、木をとり出でて割り木づくる響きに、天稚御子下りまして」(『うつほ物語』俊蔭)この『夢物語』でも、妹姫君が和琴を弾き鳴らした後に、あめわかひこが登

場する。

- 〔一二〕忘るなよ：あめわかひこ贈詠。底本「しのぶのふし」とある。他本「しのぶの草」とあることから、「しのぶの草」と改めた。
- 〔一三〕何せむと：妹姫君答詠。
- 〔一四〕これやさは：妹姫君独詠。「むば玉」は、「黒」「夜」などにかかる枕詞。この歌は、歌番号⑤と同様に、『風葉和歌集』八七七番歌「これやさはかぎりなるらんうば玉のよなよな見えし夢のかよひぢ」と類似している。
- 〔一五〕かたらはむ：帝贈詠。答歌はなし。「御返事はなかりかり」(八丁表参照)
- 〔一六〕れむせい：詳細不明。姫君の女房の人名か。
- 〔一七〕介錯：身の回りの世話や介抱をすること。また、その人。「いま一人むくろをいだいたりけるは、介錯の女房なり。」〔平家物語〕卷一一
- 〔一八〕天竺、震旦：天竺は、中国および日本で用いたインドの古称。『後漢書』西域伝に初見。震旦は、古代インドで中国をよんだ *China-shana* の語が、仏典の漢訳を通じ漢字表記されたもの。真旦・真丹・振旦・振丹・宸旦・指難などの字も用いられる。
- 〔一九〕片時：かたとき。しばし。『うつほ物語』や『源氏物語』によく見られる。
- 〔二〇〕南殿にむませ：底本「なむ殿」。「みなみどの」と読ませるのが適切か。また、「むませ」は「住ませ」の誤りか。
- 〔二一〕帝釈：帝釈天の略。梵天と共に仏法を守護する神。十二天の一つで、東方を守る。須弥山の頂、喜見城に住むとされる。ヒンズー教のインドラ神が仏教に取り入れられたものという。
- 〔二二〕観覧：天皇や上皇が御覧になること。天覧。『保元物語』、『平家物語』、『太平記』などによく見られる。
- 〔二三〕あひみては：帝贈詠。
- 〔二四〕なにかさて：姉の姫君答詠。
- 〔二五〕車を飛ばす：急ぎ駆けつけること。「今朝の禪門の気色、さる者ぐるはしき事もあらむとて、車をとばして西八条へぞおはしたる。」〔平家物語〕卷二
- 〔二六〕露の命：露のようにはない命のこと。「露」は「消ゆ」の縁語。
- 〔二七〕座敷：人の会合する場における座るべき位置。「内々に静かなる座敷にて、御前女房一、二人ばかりにてあるも」(『とはすがたり』卷三)
- 〔二八〕湯を引かせ：湯を使う。入浴する。「やうくいたはり、湯殿しつらひなどとして、御湯ひかせ奉る。」〔平家物語〕卷一〇
- 〔二九〕男房：局を賜って宮中に仕える男子。「御所中の女房男房、公卿殿上人、皆涙を流し、袖を絞らぬはなかりけり。」〔保元物語〕上
- 〔三〇〕あまの川：若君詠。
- 〔三一〕花園山：所名か。現在の京都市右京区花園付近を指すか否かは不明。

- 〈三二〉すはや…急な出来事に驚いたり、何かに気付いたときに発する語。「すは」と同意。
 「すはや、宮こそ南都へおちさせ給ふなれ。」〔平家物語 卷四〕
- 〈三三〉広縁…寝殿造りの、廂の外側で簀縁の内側。広廂。「忠信は思ふ程に焼き上げて、広縁に立ちて申しけるは、」〔義経記 卷五〕
- 〈三四〉迦陵頻伽…仏教における想像上の鳥。極楽浄土に住み、美しい声で法を説くとされることから、仏の声にたとえられる。人頭鳥身の姿を持つ。
- 〈三五〉夢にのみ…あめわかひこ詠。
- 〈三六〉王土…帝王の支配する領土のこと。「王土に住みながら、争でか朝敵とはなりたまふべき。」〔保元物語 上〕「王土ををらん虫、皇居を建てられんに、何のかりをかなすべき。」〔徒然草 第二百七段〕
- 〈三七〉生死無常、会者定離…生死無常は、仏語。生も死も一切のものは定まりがないこと。人生は儚く無常であるということ。会者定離は、会うものは必ず離れる定めにあるということ。世の無常を示す語。生者必滅と対句である。
- 〈三八〉わが…「我」とあて、あめわかひこ自身を指した一人称か。
- 〈三九〉医王…仏または菩薩のこと。医者が病人を救うように、仏が人々を救うところからのたとえ。薬師如来の異称でもある。
- 〈四〇〉十善…十種の善行。十悪の対。十悪とは、殺生・偷盜・邪淫・妄語・両舌・悪口・綺語・貪欲・瞋恚・邪見をいう。仏教で十悪を犯さないこと。不殺生から不邪見までを十善という。
- 〈四一〉和光同塵…仏教で仏・菩薩あるいはその化身としての神々が、自ら知徳の光を和らげて、煩惱の塵にまみれたこの世に姿を現して衆生を救うこと。特に日本では平安時代以降、本地垂迹思想を象徴する語となった。
- 〈四二〉時刻移りなむ…きつと時間が経ってしまうだろう。「時刻を移す」は、「時間を過ぎす」「時間が経つ」「時機をはずす」の意味。
- 〈四三〉漢の武帝…中国漢の皇帝。晩年に寵愛した李夫人を亡くした際、甘泉宮にその姿を描かせて偲んだという。
- 〈四四〉玄宗…中国唐の皇帝。初めは名君と称されたが、楊貴妃を愛してからは天下に乱れを引き起こした。
- 〈四五〉真の道…真理の道。仏の道。仏道を指す。
- 〈四六〉菩提の種…さとりを開く機縁。仏果を得るに至る動機。
- 〈四七〉眉をひらき…心中の心配事がなくなり、晴れ晴れした顔つきになる。「將軍を始め奉りて、宗徒の御一族、高・上杉の人々、皆喜悅の眉を開きける。」〔太平記 卷第一四〕
- 〈四八〉四つの恩…仏語。衆生がこの世で受ける四種の恩。四恩。経により内容を異にし、心地観経では、父母・衆生・国王・三宝の四つ、正法念経では、父・母・如来・説法

師の恩を数える。

〈四九〉無間…絶え間のないこと。八大地獄の一つで、五逆罪を犯した者が落ち、最も重い責め苦を受けるといふ無間地獄の略。

〈五〇〉多生曠劫…仏語。長い年月多くの生死を繰り返して輪廻すること。多生劫。広劫多生。

〈五一〉毘沙門…仏教神話においては、須弥山の第四層にいて、四天王の随一として、夜叉・羅刹の衆を率いて北方を守護する天神。多聞天とも。日本では七福神の一つともされる。もとヒンズー教の叙事詩において北方を守護する神で、財富の神と考えられた。

〈五二〉吉祥天女…福徳を授ける女神。もとインド神話の神であったが、仏教に入り、父を徳又迦、母を鬼子母とし、毘沙門天の妃となったと伝えられる。天女形で宝冠をいだいたく形像は種々で、顔は端麗である。功德天・宝蔵天女とも。

〈五三〉大床…寝殿造りの簀子に面した細長い部屋、もしくは書院造りの広縁のこと。広廂に同じ。「其時の將軍義家朝臣、南殿の大床に候はれけるが、御悩の剋限に及んで、」〔平家物語 卷四〕

〈五四〉凡夫…愚かな人。無知な人。平凡な人間。迷いの境界にある人。仏教の教えを知らぬ人。

〈五五〉三七日…人の死後、二一日目。また、その日に行う法事。みなのか。さんしちにち。

〈五六〉跋提河…阿特多伐底河の略。古代インドのマラ国の首都、クシナガラを流れる川。釈尊がこの川の西岸で涅槃したことにより知られる。

〈五七〉電光朝露…稲妻や朝露のように、短い時間のたとえ。また、儚い人生やものたとえ。